

《発行所》
 一般社団法人 岡山県
 医療ソーシャルワーカー協会

《事務局》
 倉敷市玉島乙島4030
 玉島病院内

岡山県医療ソーシャルワーカー協会 ニュース

2023・9・1 No.32

《発行責任者》
 森田 千賀子

《編集者》
 長瀬 紀子 森川 恭成
 沼本 晋平 山崎 規子

ご挨拶

岡山県医療ソーシャルワーカー協会

会長 森田 千賀子



態勢を取り続けてきました。

2023年5月から新型コロナウイルスが感染症法上の5類に移行されました。感染拡大からの3年間、休業（失業者）者の急増、所得の減少、生活保護申請の増加、孤立の深刻化、自粛生活による認知機能低下やうつ傾向の増大、自殺者やDVの増加といった様々な社会問題がもたらされました。そして、私たちが働く保健・医療機関においては、感染者増加による病床逼迫、院内クラスター、患者の受診控えなどの問題が起り、厳格な感染対策など最大の警戒

私たち医療ソーシャルワーカーへの影響も少なくありませんでした。日本医療ソーシャルワーカー協会が行った新型コロナウイルス感染症社会福祉士関連影響調査（2020年、2022年）によると「面会制限により患者・家族との面接ができない」「関係機関との連携構築に影響」「入退院支援加算が減った」「介護施設、転院受け入れに変化がある」「感染者の対応で退院支援ができない」「家族面会ができず患者に不穏症状」「電話面接中心支援の質の低下」「家族指導を行えないままの退院」などの影響があげられました。中でもこの3年間、私たちの業務に最も大きな影響を及ぼしたのは「面会制限」だったと思います。関係機関の立ち入りの制限により、特に退院時の協働支援体制は機能停止をしてしまいました。家族の面会制

限や面会禁止は、医療ソーシャルワーカーと家族との面接の機会をも著しく減らしました。在宅での様子や家族の関係性などが見えにくくなり、アセスメントが困難になりました。支援の質に大きく影響したと考えます。対面による人と人とのつながりを抜きに医療ソーシャルワーカーの支援は展開できないことを実感したのでした。

先述の影響調査では「面会禁止が常態化していることで慣れへの懸念」の声も上がりました。「面会制限」の影響は、もちろん医療ソーシャルワーカーへだけではありません。直接面会ができないことで患者が精神的に不安定になったり、家族も患者の入院中の様子が分からず不安が増大しました。家族や関係機関からの来訪がなくなることで、外からの目が入りにくくなるため、医療・看護・ケアが客観視されなくなりました。その場を閉鎖的にしました。その質に影響を及ぼしてはいないとは言いきれないでしょう。また、臨床倫理の立場では、患者本人や家族とスタッフのコミュニケーションの機会が減ることにより、積み上げてき

たACPやDNAR指示のブロセスが後退した可能性があることも指摘されています。コミュニケーションが中心の意思決定支援が十分にできず、書面での事前指示が独り歩きしてしまうことはなかったでしょうか？

「面会制限」は、会いたい人に会うという、人として当たり前のことを制限していることとなります。一方で、命を守るための感染対策は医療機関としての責務です。新型コロナウイルスが感染症法上の5類になってもこの感染症が無くなったわけではなく、今後新たな感染症の発生も否定はできません。「面会制限」は今後も続くことと思えます。しかし、人と人が会うことの重要さを認識した今、私たちは改めて「面会制限」の意味を問い続ける必要があるのではないかと考えます。



当院でのACP(人生会議)の取組みについて

一般財団法人共愛会 芳野病院 萩原 仁美

一般財団法人共愛会芳野病院は、岡山県北部鏡野町に位置し、一般病床、地域包括ケア病床、療養病床、(計110床)を有する病院です。法人内併設施設としては、介護老人保健施設、訪問看護、訪問介護、通所介護、住宅型有料老人ホーム、小規模多機能型居宅介護、グループホーム、重症心身障害者向けの生活介護・児童発達支援放課後等デイサービスの9事業所があり高齢者事業に特化しています。

ACP(アドバンス・ケア・プランニング)(以下人生会議)とは、「自分で自分の意思が伝えられなくなった時に備えて、信頼できる家族等と医療・ケア従事者などと、自分が希望する医療や介護についてあらかじめ話し合いを行い、共有するプロセス」のことで、話し合いは一度ではなく繰り返し行われます。

当院では2017年より人生会議の取組みを行っており、新型コロナウイルス感染症が流行する以前には、地域住民や医療・介護専門職の方々に対して、人生会議の様子を会話ドラマにし、それを見ていただく形の研修会や講演会などを行っていました。

院内の取組みでは、まず人生会議の対象者の選定について、病状や患者背景を基に医師が判断しています。その後病状説明が設定され、必ず看護師、MSWが同席し患者・家族と一緒に話を聞きま

す。医師からの説明後、看護師、MSWから患者、家族に病状の理解について、もしもこの時に行いたいかなど、具体的な話を行います。その際、今の場で全て決めなくてもいいということ、一度判断したことが絶対ではないということ、気持ちが変わるものなので変わったら伝えて欲しいということをお話ししています。面接内容は記録し、他のスタッフと共有します。

人生会議の場面ではMSWとして、患者・家族に寄り添い、本人が何を大切にしているのか、どのように過ごしているのか、どのようにかつていことを望んでいるのかということに重点を置き、話を聞いています。病状説明に同席し、患者・家族の最初の受け止めがどのような様子であるか、どう捉えているのかを直接見聞きすることで、その後の患者・家族との話し合いをスムーズに進めることが出来ます。初回の面接時には必ず看護師、MSWがペアで出席しています。理由としては、患者・家族からの質問や感情の機微など一職種、一人では見逃してしまうかもしれない情報を見逃すことなく、患者にとっての最善を話し合うためです。面接後には看護師と一緒に捉え方や感じ方のすり合わせをし、リハビリ職や管理栄養士など多職種と情報共有しながら関わり、話し合う中で、職種間の捉え方の違いや、日常生活、入院生活の関わり

の中で漏らす患者の意向など、様々な要素をまとめ、現時点での最善について検討していきます。また医療者・在宅支援者側が同じ方向を向いて患者・家族の支援に当たれるよう、支援者側の窓口役として連絡調整を行っています。

当法人では、病院に6名、老健に3名のMSWが配置されており、MSW全員がそれぞれの部署で人生会議に参加しています。人生会議開催前後に必ず、患者情報や話し合いの内容などを部署内で共有し、担当MSWがその面接の際どのように感じたか、また疑問や不安などはなかったかなどを聞き取り、一人で抱え込まないように心的負担の軽減を図っています。

今回、新型コロナウイルス感染症流行時に法人内のサービスを利用している患者・利用者・その家族に人生会議に関するアンケート調査を2回実施しました。その結果から、3年間のコロナ禍で人生会議の開催意義を感じられている人が増えてきていることがわかりました。これは新型コロナウイルス感染症という未知の感染症により、「死」を身近に感じたからかもしれない。一方で、人生の最終段階について考えたくないと思っている人も一定数いらっしゃいました。今後、人生会議を行いたいと考えている方に、話し合いの場を提供できるように活動をを行い、その人その人の選択を大事にし、MSWとして寄り添っていきたいと思います。

平成31年7月の西日本豪雨から5年を迎えました。災害から5年、真備町では多くの支援団体、真備福祉協議会、行政などのサポートにより、各地区のまちづくり推進協議会をはじめ、地域の有志から生まれた民間団体の活動を通して、「地域で支え合う町づくり」を目指して歩んできました。この真備町では、以前より町内にある医療・福祉・介護の各事業所と市の保健福祉関係部署や社会福祉協議会が「真備地区関係機関・事業所等連絡会(真備連絡会)」という会を立ち上げ、顔の見える関係を築き何でも話し合える場をつくってまいりました。豪雨災害では真備連絡会の多数の事業所が被災しました。不安な中、活動を通じてお互いの思いを汲み取り、支え合い、頑張ろう！という気持ちを共有し、「自分たちが被災しているからこそ、被災者の胸の内にある悩みや苦しみに気付き、寄り添う支援ができる」という強い思いで、現在も毎月一回真備で安心して暮らし続けるための意見交換を積極的に進めています。

参加団体も病院、高齢者支援センター、介護系施設、訪問看護ステーション、障害者作業所・支援団体、保健師、社会福祉協議会、そして被災後に真備町復興に向けた支援をしてくださっている国土交通省 中国地区整備局 高梁川・小田川緊急治水対策河川事務所、NPO法人の各種団体もメンバーに加わり、今でも以上の一層の連携を強化し、多くの職種がそれぞれの所属団体で出来る事、連携によって支え合う力が広がることを願っています。

ここ数年、コロナ禍で対面で集まることが制限されましたが、連絡会は毎月オンライン会議に形を変えて、住民を支える活動の情報共有や案内、新たな企画や講習会などをこつこつと行い、時には各活動団体が真備連絡会とコラボした取り組みも数多く行われました。

例えば、災害時に「この人は心配」という要援護者の「マイ・タイムライン(個別避難計画)」の作成を介護・障害の支援事業所が中心となつて進めています。その話し合いの場には、本人や家族、地区の組合長、民生委員、まちづくり推進協議会、関わる医療・福祉の担当者、そして時には国土交通省の河川事務所職員も参加して「どこに」「誰と」「どうやって」避難するかをみんなで話し合い、場合によっては避難時の情報共有のためにその人を支える支援者がSNSを活用したケースもあり、オーダーメイドの避難計画が作成されています。時間が

災害に負けない支え合いの地域づくり 〜西日本豪雨災害からの5年のあゆみ〜

医療法人和陽会 まび記念病院 神崎 晴子

団体がみんなで作り上げようとする姿勢がそこにはあります。

また、ピースボート災害支援センターがジャパン・プラックトフオーム(JPF)に助成申請して、採択された地域の防災・減災教育を通じて地域のコミュニティ形成事業として、昨年は「まび重機ワークシヨップ」というものが開催されました。災害後の復旧対応時、土砂や漂流物の除去など重機が必要な事態に陥ります

が、このワークシヨップを通じて初心者が3tまでの重機を扱う免許を取得し、災害現場での重機の使い方の基礎を学びました。大きな災害時にはボランティアが来ることを期待できないケースも考えられるため、自分たちで重機を動かすオペレーターになり自分たちの町を守る事を目的に有志が参加しています。

お互いさま
BCP(災害時事業継続計画)の
スローガン
のもと、昨
年に引き続
き、今年度
も香川大学
磯田千雅学
先生を講師
にBCP制作
成セミナリ
のワークショップ
を開催され
ます。ど
なたでも参

～「豪雨ニモマケズ」～

豪雨にもまけず
災害にもまけぬ
丈夫な地域のつながりをもち
いつもしずかにわらっている
地域の人や情報、資源を

よくみきしわかり そしてわすれず
東に子育ての悩みがあれば優しく見守り
西にお年寄りの困りごとがあればちょっと手を貸し
南に日々の暮らしに不安があれば寄り添って話を聞き
北に地域の課題があれば解決方法をともに考える
誰かの痛みになみだをながし
何か出来ることはないかと心をくだく
みんなが地域の一員であり主役とよばれ
支え合うことが当たり前となる

そういうまちにわたしは生きたい

〔倉敷市社会福祉協議会が発行した「被災地発支え合い活動事例集 豪雨ニモマケズ 第二版」に掲載された、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩に真備の復興と支え合い社会実現の思いを重ね、被災者や支援者の意見を参考に作成した詩〕

『脳卒中相談窓口』始めました

岡山市立市民病院 兒子 愛子

加可」で、真備連絡会だけでなく地域組織、学校、民間企業からの参加者が、BCPの研修を通じて平時から相互理解を深め、有事に必要な資源や情報を補完しあい、連携を図ることで命を守り、被害を最小限に抑えることが出来るという、真備町全体を「画」で助けあえるまちを目指した「地域包括BCP」作成が進められています。

2016年12月に発表された「脳卒中と循環器病克服5か年計画」により、脳卒中の急性期医療体制の整備が大きく進みました。2019年には日本脳卒中学会により24時間365日脳卒中や脳卒中が疑われる患者を受入れ、受け入れ後迅速に診療・治療を開始できる施設に対する「一次脳卒中センター(以下、PSC)」の認定が開始され、2020年10月からはPSCの中でも地域における核となる施設に対して、診療実績や診療体制に基づき「一次脳卒中センターコア施設(以下、PSCコア)」の認定が開始されました。現在、岡山県内では当院(岡山市立市民病院)、倉敷中央病院、川崎医科大学附属病院、川崎医科大学総合医療センターの4か所がPSCコアの認定を受けています。

前述の5か年計画に続き、2021年3月に発表された「脳卒中と循環器病克服第二次5か年計画」では、回復期以降の医療・ケアにも機軸を置いた、患者及び家族への情報提供や相談支援が提供できる体制の整備が謳われています。この整備の大きな柱の一つとして「脳卒中相談窓口」があり、脳卒中相談窓口の設置はPSCコアの認定要件の一つに定められています。更に、脳卒中相談窓口では、相談業務に従事する相談員

は定められたカリキュラム(脳卒中相談窓口に関する多職種講習会)を受講して「脳卒中療養相談士」の認定を受けたものを配置することが要件となっています。当院でも2022年4月より脳卒中相談窓口を開設し、当院で診断・治療を受けられた患者さんやそのご家族を中心に、脳卒中発症に伴う様々な生活問題・課題に関するご相談に対応しています。中心は看護師と医療ソーシャルワーカーの2名ですが、当院の脳卒中相談窓口には責任者の医師や脳卒中看護認定看護師、リハビリや薬剤師、管理栄養士など多職種が関わり、多岐にわたる相談内容に、より柔軟に、ニーズに沿った対応を目指しています。開設2年目となる今年度は、脳卒中相談窓口チームに関係するスタッフのほとんどが脳卒中療養相談士の講習を受けた、より患者さんに寄り添ったチームであり、相談窓口であることを目指しています。

脳卒中相談窓口において私たち医療ソーシャルワーカーが担う役割は、発症後のリハビリ移行(転院・施設調整)や在宅復帰後の療養環境の整備・調整が中心に捉えられがちですが、多職種で関わることが出来るからこそ、私たちスタッフが持つ患者さんの社会的背景や病前の生活状況の把握

メント力が活きてくると感じています。また、急性期・回復期の医療機関から地域の社会資源への円滑なバトンタッチを図る上では、私たちが日々の業務の中で培ってきた様々な関係機関との連携力と一つ一つの資源をつなぐコーディネート力が活かしていると感じます。また、脳卒中相談窓口の目指すところは、自院における脳卒中診療に関わる患者・家族への相談支援にとどまらず、近隣の脳卒中相談窓口が相互に連携し、地域全体の脳卒中患者の安寧な暮らしを支えるネットワークの構築です。今後、患者さんやご家族、地域住民への疾患教育なども企画・開催しながら、地域で暮らす脳卒中患者さんとのつながり、支え合える地域の構築を目指していきたいと思えます。

第56回 中国地区医療社会事業大会 岡山大会のお知らせ

テーマ: ソーシャルワーカーは必要とされている!
～今こそ倫理綱領から実践を振り返ろう～

日時: 2023年11月3日(金・祝)
会場: 岡山大学創立五十周年記念館 金光ホール 及びWEBのハイブリッド

本大会では、ソーシャルワーカーの倫理綱領を学び実践の場でどう生かし、行動していくのかを事例に落とし込んで考え、そして、ソーシャルワーカーの原理に立ち返り社会にとって不可欠であるソーシャルワーカーという専門職について考える機会としたいと考えました。

中国5県各県からの実践報告を交え、日本社会事業大学の小原真知子先生をお招きし、学び多き大会となればと思います。ぜひみなさまご参加ください!

一般社団法人岡山県医療ソーシャルワーカー協会 会長表彰受賞者

会長表彰 岡山旭東病院 片岡 志麻 氏 玉島協同病院 八谷 直博 氏

2023年度 事業計画

項目	事業内容
組織の充実強化、会員の資の向上及び伝達協働	<ul style="list-style-type: none"> 新規会員の加入促進 医療ソーシャルワークの普及、啓発活動 研修会の開催 年報・協会ニュースの発行 研究実践奨励事業 月刊ニュース「オムスワ」発行 グループ研修会支援事業 ホームページの運用 医療ソーシャルワーカーリーダーシップ研修(国立保健医療科学院)への参加 ソーシャルワーカーデーの取り組み 会員への情報配信の検討 つどいの場の開催 第56回中国地区医療社会事業大会の企画検討
関連職種団体との連携	<ul style="list-style-type: none"> 岡山県社会福祉協議会の会員としての出席 岡山県介護保険関連団体協議会への出席 倉敷市介護認定審査会運営委員会への出席 倉敷市介護認定審査会への出席 ハンセン病療養所の将来構想をすすめる会・岡山の会議への出席 岡山県難病対策協議会への出席 NPO法人岡山高齢者・障害者支援ネットワークへの参加 岡山県精神保健福祉協会への協力 関連団体実施事業の後援 日本医療ソーシャルワーカー協会の事業への協力 全国医療ソーシャルワーカー協会会長会議への出席 岡山市依存・嗜癖関連問題対策審議会への出席 津山市社会福祉協議会 津山市地域包括ケア会議委員会への出席 津山市在宅医療・介護連携推進事業会議への出席 真庭市地域包括支援センター真庭市地域包括ケア会議への出席 真庭市在宅医療・介護連携推進会議 まにわ多職種懇談会実行委員会への出席 勝田郡在宅介護連携推進事業代表者会議への出席 備前市在宅医療・介護連携推進協議会への出席 倉敷市在宅医療・介護連携推進会議への出席 岡山県エイズ医療等推進協議会への出席 岡山県在宅推進協議会への出席 岡山県地域包括ケアシステム学会への協力 岡山県地域両立支援推進チーム会議への出席 岡山災害派遣福祉チーム(DWAT)推進会議への出席 岡山市災害ボランティアネットワーク連絡会議への出席
会議運営	<ul style="list-style-type: none"> 岡山県医療ソーシャルワーカー協会総会 岡山県医療ソーシャルワーカー協会常任理事会 岡山県医療ソーシャルワーカー協会理事会 組織検討委員会 各部運営会議
活動社会	<ul style="list-style-type: none"> 岡山県難病医療福祉相談会への相談員の派遣 ハンセンボランティアゆいの会への協力 NPO法人岡山高齢者・障害者支援ネットワーク主催相談会へ相談員の派遣 大規模災害の支援活動

2023年度 一般社団法人岡山県医療ソーシャルワーカー協会役員・運営委員

職名	氏名	所属	職名	氏名	所属
会長	森田 千賀子	水島協同病院	運営委員	榮田 勇希	倉敷リハビリテーション病院
副会長	長瀬 紀子	倉敷中央病院	〃	大野 ひとみ	玉島病院
〃	片岡 志麻	岡山旭東病院	〃	大森 誠人	松田病院
常任理事	有本 明美	玉島病院	〃	神崎 晴子	まび記念病院
〃	原田 久美子	みわ記念病院	〃	小西 遥	岡山済生会外来センター病院
〃	若林 里佳	水島中央病院	〃	柴田 由紀子	岡山健康づくり財団附属病院
理事	池田 明憲	津山第一病院	〃	高岡 憲一	倉敷平成病院
〃	板野 宏美	岡山ひだまりの里病院	〃	高橋 誉文	川崎医科大学附属病院
〃	新名 早希	倉敷スイートホスピタル	〃	田中 詩菜	国立病院機構岡山医療センター
〃	鈴木 智恵	川崎医科大学総合医療センター	〃	田中 志野	渡辺胃腸科外科病院
〃	沼本 晋平	吉備高原医療リハビリテーションセンター	〃	友本 敦子	介護老人保健施設和光園
〃	八谷 直博	玉島協同病院	〃	中野 有理	落合病院
〃	松倉 翔	しげい病院	〃	難波 由紀恵	岡山協立病院
〃	溝手 知江	済生会吉備病院	〃	日高 千陽	岡山大学病院
〃	宮松 聡美	瀬戸内市立瀬戸内市民病院	〃	福田 倫子	ルスコクリニック
〃	宗好 祐子	岡山赤十字病院	〃	松尾 成哲	水島中央病院
〃	森川 恭成	つばさクリニック	〃	松岡 邦彦	茶屋町在宅診療所
〃	山崎 規子	岡山リハビリテーション病院	〃	眞宮 昌代	光山病院
監事	山川 ちづる	岡山ひだまりの里病院	〃	水野 文彦	岡山中央病院
〃	横山 幸生	かとう内科並木通り診療所	〃	溝口 修平	介護老人保健施設備前さつき苑
顧問	石橋 京子	岡山大学病院	〃	三村 陽子	重井医学研究所附属病院
運営委員	伊瀬 恭子	玉野医療センター玉野三井病院	〃	山口 葉子	岡山療護センター
〃	井上 嵯友	倉敷中央病院	〃	山崎 早苗	中谷外科病院
〃	妹脊 幸実	さとう記念病院			

編集後記

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが、令和5年5月8日から5類感染症に移行されました。分類変更後も感染力の強さに変わりはありませんが、私が勤務する医療機関では面会制限が緩和されたことで、家族が患者の手をとって励ます様子を再び見るようになり、「人と人の繋がり」の大切さをあらためて感じています。また、同じく制限下にあった地域活動への参加も活発になり、多くの医療ソーシャルワーカーが困難さを覚えたであろう「橋渡しをすること」も、働きかけやすくなったことと思います。

社会全体を見ても日常を取り戻しつつありますが、気を緩めることなく、これまでの経験を活かした取り組みが必要になります。例えば、当院ではリモートでのカンファレンスが浸透したことにより、遠隔地へ退院支援の際の連携が円滑になり、結果的に多くのメリットをもたらしました。私達の置かれている環境は違いますが、会員相互で経験を共有し、クライアントのために何が出来るか共に考え、発展させていきたいと思っています。

(S・N)